

レズリーの变化

——賃金基金説との関係——

Leslie's Change of attitude towards wage-fund theory

阿 部 秀 二 郎
Abe, Shujiro

ABSTRACT

It is true that Mill modified his wage-fund theory in response to Henry Thornton's criticize in his review of Thornton's *On Labour*. Jevons and Foxwell, however, regarded Leslie as the person who made Mill modify wage-fund theory.

In this paper, at first, the particular point of Leslie's criticize is considered. Next we consider the backgrounds of his criticize. At last the goal of this paper is to show the influences of Henry Maine on Leslie's criticize.

はじめに

ジェヴォンズは、ミルに賃金基金説の展開を放棄させた人物としてソーントンではなく、レズリーを挙げる。(Jevons [1874], p.77) その事実に対してブラックは、以下のように述べる。ミルが賃金基金説を撤回するきっかけとなったとされているソーントンの『労働論』が出版されたのが1869年であるのに対して、レズリーは1868年の「経済学と賃金率」という論文の中で、すでに賃金基金の存在を否定していた。しかし賃金基金説への批判はすでにロングの1866年の著書とソーントンの1867年の論文によってなされていたのであって、ジェヴォンズがレズリーの名を挙げるのは興味をそそられる。(Black [2002], p.26)

ミルによる賃金基金説の撤回自体にも論争があるが、ミル自身がソーントンの批判を受けて『労働論』書評において、自らの考え方の少なくとも部分を修正することに至った事実は否定できない。⁽¹⁾ ジェヴォンズがその事実を無視した

という指摘も不可能ではないが、根拠に乏しい。したがってジェヴォンズは何をもって賃金基金説が否定されることになる重要な起点と考えたのかを考察してみる価値はあるだろう。そして考察を行う場合には必然レズリーの賃金基金説の否定の背景に目を向けることになる。その考察を導入と位置づけ、レズリーの経済学そして経済学方法論における特徴を時代的な文脈から読み取ることで、その時代及びその後の経済学に与えることになるレズリーの貢献について検証することを本稿の目的とする。

本稿は、以下の順序に従って展開される。まずⅠ.で、レズリーが行った賃金基金説批判を考察する。そしてⅡ.でその批判を彼の初期文献と比較し、有名なレズリーのスミス経済学の分析を通じ、初期文献における概念の変化の特徴を分析する。そしてⅢ.において、その特徴を見出した起点を歴史法学派のメインとの関係において考察する。⁽²⁾

Ⅰ. レズリーの賃金基金説批判

Ⅰ-1. 当時の経済学の動向

レズリーの賃金基金説批判を考察する前に、ブラックの指摘を当時のフォックスウェルの論文を見ることで検証してみよう。1887年の「イギリス経済学の動向」という論文において、フォックスウェルは以下のように述べる。経済学は過去の方から新しい方向へと向かいつつある。正統派の権威の低下に伴い、⁽³⁾「マルクス、ジェヴォンズ、クリフ・レズリーが（新しい）学派を創設した。」そして新しい方向への経済学の発展は三つの要素の結合生産物であり、それらは

✓(1) 賃金基金説については、馬渡 [1997] の第6章、および深貝 [1995] の第4章を参照。賃金基金説の「撤回」「修正」をめぐる議論には、労働運動の高揚という時代状況が大きな影響を及ぼしている。固定的な賃金基金のもとにおいて、労働組合は賃金を上昇させえない、という立場から、賃金を上昇させうる可能性を組合は有するという立場への変更へと至る過程において、理論の精緻化が図られたと指摘できる。時代的な社会的背景抜きに「撤回」論議は成立しない。

(2) またレズリー経済学の特徴を分析することは、歴史学的な接近方法に関する大陸とイギリスとの関連についての考察を深めるという目的も有する。したがって本稿の目的は阿部 [2005a]、阿部 [2005b] と通じている。

「理論に対する批判 (theoretic criticism)・歴史的方法・人道的感情 (humanistic feeling)」であった。(Foxwell [1888], p.87)「理論に対する批判」は「科学の予想した結果と日々の経験との間の明確な不一致」がもたらしたものである。「歴史的方法」はオーティンやヘンリー・メインやクリフ・レズリーの著作に見出される一般的な歴史的法学的研究の成果に、コントやスペンサーやダーウィンなどの生物学の社会学的類似とドイツの形而上学的進展の影響を加えたものである。「人間中心的感情 (humanistic feeling)」は「経済的な生活と制度に対する道徳的で人間中心的な (humanistic) 批判であり、この立場にある人は「純粋理論家は仮説 (hyposesis) に関心があり、歴史家は事実に関心があるのと同じように、理想 (ideals) に関心がある。」(pp.87-90)

フォックスウェルは、「人間中心的感情」はイギリスにおいて過去から存在してきたものであるとして、新しい経済学への方向の消極的な要因として位置づけている。そして「理論に対する批判」と「歴史的方法」の中では後者の「歴史的方法」をもっとも重要な要素（積極的な要素）であると位置づけている。そしてその両方の要素において挙げられている経済学者がジェヴォンズとレズリーなのである。ジェヴォンズについては後で展開することとして、「歴史的方法」という要素だけではなく、「理論に対する批判」という要素においてもレズリーが引き合いに出されている。批判された理論の具体的な例として賃金基金説が挙げられており、「古い賃金基金説の奇妙さはロング、サーガント、クリフ・レズリーのような人々によって明らかにされ」、ソーントンに対するミルの譲歩によって古い学説は衝撃を受けたとフォックスウェルはまとめている。(p.88) つまりミルが実際に賃金基金説の修正を認めた相手はソーントンであったとし

✓(3) 後のシュンペータによればフォックスウェルの「学派」の定義が不完全であるために、レズリーだけではなく、ジェヴォンズをも学派の創設者としてしまったということになるだろう。しかし当時において経済学者に与えたレズリー及びジェヴォンズの特異な影響力の大きさを表していることは否定できない。学派の定義については Schumpeter [1954], p.470 (訳 990 ページ) を参照。佐々木 [2000] の 11 ページにおいて、学派及びフォックスウェルの指摘についても言及されている。

でも、その修正のきっかけはすでにロングやレズリーによって与えられていたことになる。

I-2. 「経済学と賃金率」

レズリーは1868年の「経済学と賃金率」という論文において、すでに賃金論はソーントンによって否定されたものであるという認識を示している。⁽⁴⁾つまりブラックが指摘したようにソーントンの1867年の論文をもってレズリーは古典派賃金論の方向を示唆している。レズリーによれば、古典派の賃金論は二つの命題から構成されており、その命題は以下のものである。(1) 賃金基金が存在し、労働者数と賃金基金との大きさから平均賃金率が決定する。(2) 労働者間における競争が存在し、労働の質の相違を斟酌した上で、それぞれの仕事において賃金率は等しくなる。基金説の具体的な論者としてマカロックを挙げながら、レズリーは、賃金基金の不存在、平均賃金率の実質的な無意味さ、競争による賃金の平等化の否定、競争以外による賃金率の決定、などの理由から命題は否定されてきたと指摘した後で、自身の否定根拠を挙げる。

(1) の命題について、レズリーは賃金基金が固定されていると想定する場合と固定されていないと想定する場合とに分ける。賃金基金が固定されていないと想定する場合には、正しい労働需要の分析に基づく賃金決定論にはなっておらず、賃金論として古典派は分配論を完成させていないことになるし、賃金基金を固定していると想定する場合には、資本の移動・生産要素としての労働との代替性などを考慮しない点などからも、明らかに間違っているという根拠を挙げる。(2) の命題について、レズリーはスミスの『国富論』が出版された当時にヤングが収集した統計データと、1850年と51年にケアード (Caird) が収集

(4) 当該論文において、レズリーは1868年の段階でこう述べていることに興味を覚える。「……賃金論はソーントンによって否定され、ミル氏やフォーセット氏やウェイリー氏による重要な変更 (modifications) と修正 (corrections) にさらされて……」(Leslie [1868], p.358) つまり1869年以前のソーントン『労働論』書評以前に基金説の「修正」が行われているという認識が当時の経済学者には存在したのである。

した統計データとを比較して、貨幣賃金において不平等が拡大しているという事実に加えて、食料価格（物価）を斟酌した場合の実質賃金において不平等はさらに拡大すると指摘し、賃金は実際は不平等化していると指摘した。さらに1860年代にはその不平等がさらに拡大していること、そして理論的には労働者が自由に移動でき労働供給を妨げる要因がないような隣接した地域においても、不平等が存在していることを、さまざまな実証的データに基づき指摘し、スミスとミルが論じる労働者の自由な競争によって労働はあたかも資本と同様に供給され、賃金率が平等化するという理論的な賃金論を批判する。⁽⁵⁾ (pp.362-71)

さらにレズリーはミルの資本に関する第四命題に関連するロングのミル賃金論批判を考察することで、当時議論されていた賃金決定理論の非現実性を指摘する。ミルの資本に関する第四命題は「商品への需要は労働への需要ではない」⁽⁶⁾である。この命題は生産時間を考慮にいれた上で、現在の賃金を決定するのは予想収益ではなく、すでに存在する過去に生産された実物のファンドであるという賃金決定における実物基金理論である。そしてこの命題に対するロングとシニアの批判（「商品需要は労働需要」）に対して、レズリーは批判する。「ロング氏は豊かなものが商品への個人的な支出を減らし、労働を代わりに購入することで賃金になんらかの上乗せをできるという学説を……あざ笑う。『その過程は杖の上の部分を取り下部分に付け足すことで、杖を長くしようとするのと同じだ』と。シニア氏とロング氏の双方の間違いは、労働者が生産に関わったすべての物の価格を獲得できると想定していることにある。」(p.375) レズリーが批判したかったのは、商品需要は労働移動を通して他の生産部門での労働需

(5) 賃金基金をめぐる議論において、スミスを直接引き合いに出すレズリーの論文は、ヴィントによる賃金基金説の成立をスミスに求める研究を裏付けるものであると指摘できる。深貝 [1995] 109, 127 ページ参照。

(6) 「商品に対する需要は、どの生産部門に労働と資本が使用されるべきかを決定する。それは労働の方向を決定する。しかし、労働そのものの多少を決定するものでもなければ、労働の維持、ないし給与の多少を決定するものでもない。これらのものは、労働の維持および報酬に直接提供されるような資本そのほかのファンドの分量によって、決定される」(Mill [1871], p.78, 訳 (1) 160-1 ページ)

要を喚起するというロングやシニアが指摘したかった理論的な過程ではなく、現存する具体的な労働者が雇用されなくなってしまうこと、そして自由な労働移動が妨げられている現状のために、賃金の格差は増大し、賃金決定理論は現状を何も説明していないことを指摘するものであった。ロングとシニアはミルの賃金基金説を批判しながら、正しい賃金決定の仕組みを提起できていないことをレズリーは批判したのである。そしてレズリーにとって正しい賃金決定の仕組みは、一つではない。「賃金率を規定する、またはすべき条件に関して普遍的なルール」などないのであり、「それぞれの個別事例において賃金率を決定する諸原因は、多様で可変的である。」(p.378) つまり場合によっては雇用者が競争する労働者に対して団結し、場合によっては雇用者は団結する労働者に対して競争し、場合によっては雇用者と労働者の協働が存在する。

したがってレズリーにとって、賃金基金説によって労働運動の実質的無効化を主張する経済学者だけではなく、労働運動や労働者の団結によって、賃金を上昇させるべきであるし固定的な賃金基金が存在しなければその余地はあるとして賃金基金説を批判した経済学者も賃金決定において現実にも目を向けてはいないことになる。「ミル氏、フォーセット氏、ソーントン氏、ウェイリー氏は団結がなければ労働者は完全に雇用者の言いなりになってしまうことを例示した。……ジェヴォンズ氏が労働時間短縮のための団結権を正当なものであると主張するときに、労働の適正価格を獲得するためには労働者が……団結する必要があると認めているようである。……」しかし「ただ労働者がもっぱら団結に頼るのは有害な誤謬である。」(p.377)

このように労働運動に対して警鐘を鳴らす指摘はジェヴォンズにおいても存在しており、レズリーとジェヴォンズは賃金決定と労働運動に対して近い認識を有していたと指摘する余地がある。しかしレズリーの念頭には農業労働者の存在があった。労働運動が分配面に注意を向けるために、重要な生産性向上への議論が深まらないという論理において、団結することができない労働者として農業労働者が引き合いに出されるのである。「団結するよりも増大していく競

争する力が——教育や賃金統計の収集や土地法の改革などによって——，農業労働者に関して労働階級が追求すべき力なのである。」(p.378)⁽⁷⁾

上に挙げた賃金基金説の命題において，結局レズリーが彼自身強い意図で明確に否定したのは，(2) の賃金の平等化であり，またその過程としての競争であり，さらに賃金決定に対する表面的な認識と，それに基づく労働者側の反応であった。特徴は，その否定が論理的なものによるのではなく，歴史的かつ統計的・実証的なものによるという点にある。

II. 歴史的 method の背景

I. では，賃金基金説に関する命題を否定する際に，レズリーが歴史的 method と帰納的方法とをその特徴としていた点を指摘した。それは以下の事実に基づくものである。

1875 年の「ドイツ経済学史」という論文において，「現在における経済構造と社会の条件を生み出した継起と共存の法則を発見する目的」を有するという点において，「帰納的方法と歴史的 method とは同一である」とレズリーは述べる。(Leslie [1875], p.83)

しかし次の事実にも目を向けて，レズリーの歴史的 method について考察をしなければならない。その事実とは，経済学史において「歴史学派」と位置づけられるレズリーは，当然歴史的 method を展開するが，その歴史的 method をレズリーはドイツ歴史学派との継承性を否定する形で，ドイツ歴史学派の書物を読む以前に，歴史法学者のメインから獲得したと述べている事実である。(Leslie [1883], Koot [1975], p.325)

つまり上の二つの事実から，レズリーの採用した歴史的 method は帰納的方法で

(7) ジェヴォンズの労働運動に対する姿勢については阿部 [1998] 参照。なお本稿では十分に展開する余裕を持たないが，レズリーの賃金決定に関する農業労働者への意識の背景には土地問題についての注意が存在するのであって，アイリッシュ・エコノミストという側面の考察を深める可能性があるだろう。

(8) Schumpeter [1954], p.823, 訳 1730-1 ページ

あり、メインの歴史的方法だということになる。有名な「身分から契約へ」という歴史法則の発見が歴史的な事実からの帰納的な推論となっていることをもって、レズリーはメインの歴史的帰納法の継承者であると推測することは容易だが、問題はレズリーが歴史的方法を利用しようとする意図あるいは背景とメインのそれとは同じものと考えることができるかである。もし異なるならば、少なくとも「歴史的方法」の意味合いが変化することになる。メインの歴史的方法については阿部 [2005b] を参考にするとして、レズリーの意図と背景とを見出した上で、メインのそれと比較してみよう。

II-1. 歴史的方法への導入

『政治・道徳哲学に関する論文集』の「序」において、レズリーは自らの経済学への入り口そして帰納的方法についての初期の認識のきっかけを次のように説明している。

「ミル氏が若いころにオースチン氏の講義に出席したのに対して、著者は幸運にもミドル・テンプル法学院でヘンリー・メイン卿の講義に出席でき、まずそこで、『古代法』や『東方や西方の村落共同体』や『初期制度史の講義』において成功を収めるような歴史的方法を学んだ……。法律と経済学の両方の教官を務めながら、著者はその方法を経済問題に適用するようになり、社会の現状を、ヘンリー・メイン卿の視点から長い進化の結果として、見るようになったのである。さらなる考察によって著者は、将来のイギリスの経済学者はミル氏の学派におけるのと同様に、スタップ氏とヘンリー・メイン卿の両方の学派でも研究しなければならないと確信するようになった。」(Leslie [1879b], p.vi 『』は著者による)

レズリーは1847年に文学士号を取得し、51年に法学士号を取得し、53年にはベルファストのクィーンズ・カレッジで教鞭を取る事になる。そしてメインの講義に出席したのは1857年であるとされているので、それ以降の著作において

(9) Koot [1975], p.325

メインの歴史的方法に影響を受けているということになる。『政治と道德に関する論文集』に収められているレズリーの初期著作「時事問題—平和か？」と「歴史が予言するヨーロッパの将来」とは、いずれも 1841 年という非常に早い段階にその主要内容が構築されており、そのテーマはヨーロッパにおいて頻出していた戦争に関連していた⁽¹⁰⁾。それらの論文特に後者の論文においては、時間的に遡り他の国々の事情をも考慮することで、歴史的で比較的な分析がなされていると指摘できる。しかしレズリーが脚注で「主たる原理と結論については堅持しているのであって、すべての文や表現は堅持しない」と指摘しているように、またメインを通して歴史的方法をレズリーは意識したはずであるという前提に立てば、歴史的で比較的な分析が 1841 年の段階でたとえ展開されたとしてもレズリーの中で歴史的方法が重視されることはなかったであろう。またこの二つの論文では経済的な説明に乏しい。

その理由から、メインの影響を受ける前で、経済学の知識についても十分に獲得していないと思われる頃の経済学関係の著作を見出すことができれば、メインの歴史的方法の特徴についてより明確にすることができる。その論文は「競争の法則に基づく労働階級の自己への依存」（1851 年）である。

この論文でレズリーは、労働階級は自らの経済的条件を自分たちで支配する原因に依存していると指摘する。その原因は労働の価値に影響を与えるものであり、「自然法則」に則るものである。そして「富の生産と分配の自然法則の働き」に則ることが経済的な幸福を増大させること、大多数の人々の自己への依存（が存在すること）をレズリーは「信じている」のであって、この論文において歴史的な分析はほんの僅かしか存在しない。その「自然法則」にとって人為的な規制（法律によるものや労働者自身によるもの）は経済的な発展の妨

(10) ブラックは、この戦争に関する論文と金に関する論文などの初期著作に目を向けている。
Black [2002]

(11) レズリーが提示する原因は二つであり、他方の原因は賃金の節約であって、労働階級の繁栄をもたらすと指摘されている。しかし該当論文においては展開されていない。(Leslie [1851], p.87)

げになるという認識を有するレズリーは、その原因と解決法を次のように提示する。人為的な規制を生み出す原因は、「自己への依存」に抗う理論であり、その理論の根源に「競争」の性質と結果についての間違った考え方が存在するのであるから、「競争」の性質と結果について正しい認識を抱かせることが解決法になるのである。その理論とは固定した賃金基金という意味での賃金基金説であり、「競争」の性質と結果についての間違った考え方とは、労働者は階級内部での競争と資本家との競争で不利益を被るという考え方であった。その考え方を展開している人物としてレズリーが引き合いに出したのがミルであり、ミルは「競争」がもたらす生産性の増大に基づく賃金基金増大の可能性を否定し、賃金基金を所与として労働者数の増大がもたらす分配分の減少に注意を喚起していると認識された⁽¹²⁾。

その考え方に対して、競争は生産性を高め、外国との競争において自国労働者を優位に立たせ、自国労働者が外国から需要されることによって、国内労働者数が減少して、増大した賃金基金における分配分をより多く獲得するようになるという考え方をレズリーは対峙させる。そして現実においてこの競争を妨げている要因として、レズリーが挙げるのが、「協同の原則 (co-operative principle)」と労働者の団結であった。前者は「他の人々の勤労の利益が (自らの利益に) 取って代わることは、自己の奮発への刺激を弱めてしまう」し、後者は「幸福な状態への到達を迫及することができる勤労の自然の行程への妨げ」だからという理由であった。(Leslie [1851], pp.74-82)

(12) レズリーが引き合いに出しているミルの著作は不明確である。該当論文ではジェームズ・ミルの1821年の著作である『経済学綱要』に関連する著書においてジョン・ミルが展開している議論としき指摘されていない。(Leslie [1851], p.74) ミルの1844年の論文および1848年に出版された『原理』初版に基づいて、レズリーは議論していると思われる。またレズリーがこのような議論を展開するきっかけを提供したのがイギリスへのアイルランド移民であることは、イギリス歴史学派が台頭するきっかけとしてイギリス及び周辺国との関係を抜きにして語ることができないという論理を強める要素として指摘できる。その論文はジョージ・コーンウェル・ルイスの1836年の「イギリスにおけるアイルランド貧民の状態」という論文であり、レズリーはこのアイルランドの移民問題について、後に1868年の「経済学と移民」(Leslie [1868a])という論文でより深く展開している。

このように自己への依存は、自分の利益に基づき他との競争を通じて自己のみならず社会全体に利益をもたらすのであり、その行程をレズリーは「神の自然法則」と呼び、競争を「神が命じた勤労のレース」と考えていた。そしてレズリーがこのように「自然の法則」と「神」という用語を、初期の論文において効果的に利用していることに注意を促しておかなければならない。次にレズリーが歴史的方法と帰納的方法とを、＜アプリオリな＞演繹的方法と対峙させているスミスに関する論文を考察することで、「自然の法則」や「神」に関する論述の転換を明らかにしよう。

II-2. スミス経済学

1851年当時における経済学的な知識は、以下のような展開を示したことをわれわれは認識している。スミスの『国富論』そしてその後『国富論』の演繹的な側面はリカードウの『課税の原理』へと継承され、帰納的な側面はマルサスの『人口論』へと継承された。リカードウとマルサスとがそれぞれ採用した方法論の対立はすでにスミスの中に存在していた。そしてこの方法論の対立を明確にしたのがレズリーであった。

レズリーは1870年の「スミスの経済学」において、リカードウではなく、ロウを演繹的な方法を採用する代表的人物として位置づけ、ロウによる演繹の普遍的な経済学の定義に対して次のように批判する。

「ロウ氏はスミスの支持者の学派の考え方に言い表し方を与えた。経済学は、スミス自身がそう呼ぶ「諸国民の富の性質と原因に関する研究」ではなく、人間精神の構造から引き出される、自然の不変の法則に基づく、必然で普遍的な真理の体系を追究するものであると。……反対である。経済学は真の意味において自然法則の体系ではなく、あるいは普遍的な不変の真理の体系ではなく、主要な著述家の歴史と性格によって色づけされた特殊の歴史の結果である考察と学説の寄せ集めである。」(Leslie [1870], p.148)

そしてロウが採用する演繹的な方法は、スミス経済学の大きな二つの底流の

うちの一つであると指摘する。そのうちの一つの方法は「モンテスキューの帰納的な」方法であり、他方は「自然法」の影響に基づく方法論である。「その基本的な概念が経済学は確實視される自然の諸法則の体系であるというものであって、自然法体系そして自然の秩序という古代の擬制の派生物である。そして現代においてその擬制に対して一方では神学によって、他方では……人間の法律の愚かさや不平等さが広まることに対する抵抗によって与えられた形式を有するのである。」(p.149 傍点は著者による)つまりロウが経済学を演繹的普遍的な理論と把握することになる遠因はスミスに存在しているという認識をレズリーは有する。「スミスが見ていなかったものは、自身の体系が特定の歴史の生産物であること、スミスが自然体系 (system of nature) と考えるものは、その時代の考え方や状況によって形成され、自身の性向や生活の過程によって色づけられた形式で、古代の人々が想定した自然の体系 (System of Nature) の後継だということである。」(p.149 傍点は著者による)

スミスは過去からの自然法則の伝統を引きずっているというのがレズリーの理解であるが、具体的にはスミスの思想の土台はギリシャ人の思索に端を発してローマの司法思想を通じて伝わってきた自然の理論なのである。そしてこの自然の理論によって人間の諸制度が妨げてきた自然法 (Code of Nature) が存在するということが明らかにされるのである。しかしそもそもの自然は疑われることなく、その予想に基づく仮定からアプリオリに演繹するという間違いを含んでいるとレズリーは指摘する。間違っている理由は「自然と仮定されているものは根底において構成と配置に関して単なる憶測に過ぎない」(p.151) からである。この理想としての仮定は、「自然状態」や「自然の傾向」や「人間本性 (human nature) の原理」を生み出すことになり、それらは現実と理想との間に、実際にそうである部分とそうなるべきである部分との間に永続的に混乱を生むことになるとレズリーは論じる。スミスの場合にも同様で、自然の理論は「神学」、「政治史」、「スミス自身の精神」によって形態を与えられることになったのである。その中でも特に「神学」がスミスに与えた影響をレズリーは重要

視する。なぜならばスミスには演繹的な方法と対立する帰納的な方法への信頼が存在したにも関わらず、演繹や一般化をかなりの範囲にわたって展開できた理由は、「自然の調和的な決まり（code）が『偉大で、博愛に満ち、全能である神』という神学的な概念と混在化した」からである。（p.153）こうして「（歴史的な）初期の思想（自然法）から引き出された考え方は、神の計画へと替わった。」

そして「神の計画」である自然法は、必然的に平等性を経済学にもたらすことにある。したがって賃金・利潤・地代などそれぞれの分配分も平等に近づいているはずである。そして実際にスミスの経済学におけるアプリオリな側面しか見ていない後の経済学者（リカードウ派）は『『自然価格』・『自然賃金』・『自然利潤』の発見を目的と』（p.151）し、I.で指摘したようなレズリーが否定する賃金基金説の命題を獲得することになったのである。しかしレズリーはスミスの経済学に存在する帰納的な側面によって、スミスはリカードウ派の人々とは異なり、賃金の平等性を否定したし、「競争が完全にそして自由に作用する場合においてさえ、スミスは明確に、賃金と利潤の両方の場合の平等性への傾向を個別の世界の定常的で単純な条件に限定した。」（p.164）賃金の平等性は「定常的な産業の状態および近隣との交易」に限定されるのであり、平等性が現実社会において普遍的で広範に、存在することをスミスは否定することができたのである。こうしてスミスにとって現実の社会と自然法との整合性を保つためには、対象とする社会の状態や広さを制限しなければならないのであったのだが、それ以外にも自然法はスミスに対して不正義を肯定するきっかけを提供することになっているとレズリーは指摘する。自然法的な概念に基づいて「すべての人間の自然な努力」が自然的富と繁栄の原因とされる場合に、女性教育は、女性の経済生産性を生み出すための活力源を養成するためではなく、従順な良妻賢母としての資質を高めるためのものであるとするスミスの認識をレズリーは指摘し、自然法がもたらすものとしての社会的な不正義の存在を主張する。（pp.164-66）

Ⅲ. メインの影響

1851年の「競争の法則に基づく労働階級の自己への依存」における重要な概念であった「神の自然法則」と「神が命じた勤労のレース」は、レズリーが経済学を歴史的に研究する以前に、1870年の論文で明確に把握されることになるスミス経済学の継承者たちの特徴を端的に現している。その特徴とは経済学の体系は、スミスが「自然の仮説」と呼ぶ自然法のアプリオリな側面に神学的な要素が合成した「自然的自由」の体系だということである。そして、まだレズリー自身も1851年の段階ではその概念の限定性（狭さ）や不正義に気づいていないことはない。レズリーがそのことに気づくためには、自然法という思想自体の客観的な考察を待たなければならない。そしてその考察をもたらしたのがメインの歴史的方法である。

レズリーは『古代法』においてメインが考察した自然法と実定法との関係が、スミスにおける自然法と実定法との関係の把握に類似していると指摘する。

「スミスは次のように述べる。『すべての実定法（positive law）の体系は、自然的な法律学の体系への多かれ少なかれ不完全な試みとみなしてよいかもしれない』。法律における考察の主たる目的は『すべての実定法（positive institutions）から独立した正義の自然なルールは何か』を確認することである。この記述は、ローマの法律家の概念において自然法が占める位置についてのメイン氏の記述と完全に一致している。『自然という言葉が身近になってから、古い万民法こそが失われた自然法であったという信念が次第にローマの法律家の間に広まった。ローマ人は既存の法の注意深い観察によって、自然の支配の痕跡をすでに提示した法と、法的な純化によってそれを提示することができる法とを選び分けられると考えた。』（Leslie [1870], p.153 傍点は著者による）

スミスが古代ローマの法律家と同じ思想をたどっていることになるというレズリーの把握は、スミス経済学及びその後の経済学に対する自然法思想の影響と帰納法への要請についてレズリーがメインから多くを引き出していることに

についてのヒントを与える。しかしそのためにはレズリーが引用するメイン『古代法』のその後の展開を考察しなければならない。

Ⅲ-1. 自然法思想

Ⅱ-2.でも見たが、レズリーは自然法を「自然仮説 (Natural Hypothesis)」と呼ぶように (Leslie [1870], p.161), 自然法は単なる憶測でしかないという認識を抱く。そしてその認識はメインも共有しているものであった。「(ローマ法も含めて) それまで科学の立場に立っていたものの大部分が一連の憶測でしかなかった」(Maine [1861], p.109, Leslie [1876], p.239) のであり、法律が依存すべき原理は「単純性や相対性」という表面的な特徴であったために、法律学は進歩せず当時において混乱を来たしているとメインは考察した。このように自然法が憶測であるという認識は自然法の歴史に関するメインの分析によって理解できる。メインによれば以下ようになる。自然法は古代ギリシャのストア哲学に淵源を見出すものであり、事象を説明するだけではなく、物的な世界に規範を加えたものとして概念化された。そしてローマ人によるギリシャ征服後に、ローマ帝国に自然法は広まった。もともとローマ社会には市民法と区別される万民法(異民族間または異民族との関係に関する法律)が存在しており、ギリシャ支配後に万民法が自然法であるとローマ人にも認識されるように至った。その場合万民法には存在していた規範的な意味を持たない「<平準化 (levelling)>」あるいは「不規則性の修正」を意味する「*aequus* (Equity)」という言葉は、ギリシャ社会で展開した規範的な意味を持つ「*AEquitas* (Equity)」という言葉同様に、キケロによって同様な意味を持つ語として同一視されることになったのである。この時点で「神」という憶測に基づく存在による自然の支配が全般的にローマ法と理解されるようになった。(阿部 [2005b], 4-5 ページ)

自然法の歴史的な展開を分析した場合に、規範的な要素を含まない「平準化」という概念を有する万民法の存在や、キケロによるローマ法の規範的な自然法への統一などの事実によって、自然法思想を客観的に把握することができるこ

とになる。しかしスミスは強い私的見解 (bias) に基づいてローマ時代の法律家と同様に、自らの使命を自然的調和へと至るプロセスを詳細な観察によって明らかにすることであると考えたのである。そして自然法の影響については、ローマ時代の法律が自然法の内容よりも自然法が有する「単純性や相対性」という表面的な特徴に引き付けられて展開し、その後法律の歴史的な考察・修正をしないまま混乱した状況に至るのに対して、自然法を土台に据えたスミス経済学のその後の発展は、説明原理としての単純性や一貫性・自然状態という理想化に多くの注意が引き付けられ、過度で速すぎる抽象化に注意を与えようとしたスミスの歴史的な考察・修正の視点は重要視されずに、その後経済学は混乱した状態⁽¹³⁾に至る。

Ⅲ-2. 帰納法の要請

スミスの思想には「神学」的な要素が強く影響しており、「自然的自由」とは各人が自らの利益に基づいて行う活動が社会全体の利益をもたらすことになっており、その活動に対する妨害が存在しないことを意味する。しかし各個人の利益が社会全体の利益と調和するという自然法の論理は証明されているわけではない。そこでスミスの帰納的分析は登場する。⁽¹⁴⁾したがって『国富論』でレズリーが展開する帰納は、自然法という既存の理論の検証を意味することになる。

(13) スミス方法論において、個人が利己的に活動することで社会全体の利益になるという考え方は『国富論』と『道徳感情論』において共通であるとレズリーは指摘する。(Leslie [1870], p.154) レズリーの把握はしたがっていわゆるドイツ歴史学派の提起した『アダム・スミス問題』を無意味化することになる。またレズリーはフィジオクラートとスミスとの近似性を示した後で、『国富論』も『道徳感情論』もスミス体系の一部でしかないと指摘し、体系性の内部に法学などの他の科学も位置づけているという認識をスミスは有するのであるから、『国富論』の背後には神学などが必然的に入り込んでいるということになる。「さらにスミスには、……自由・正義・神の慈愛の体系として広めた体系が＜人間の私的な利益と特殊な秩序の先入観＞によってどのようにして自分だけの利益 (selfishness) の体系へと形成されていくのかわからなかった。」(p.149) またフィジオクラートとの関係において、スミスは明確に『国富論』を展開する際に、フィジオクラートから直接的で大きな影響を受けていないとレズリーは指摘する。

(14) レズリーの帰納法に関する整理と分析は、佐々木 [2000] を参照。

これは以下の引用文でレズリーが指摘するように、その後の科学的方法論の発展からすると正確な手続きとはなっていない。「スミスはいわゆる自然法自体の〈証拠〉あるいは自明さを、注意深く考察した現象の証拠と混ぜ合わせた。真理はこうである。スミスは自然科学が帰納の準則を発展させる以前に書いており、膨大な量の事例を入手したときに帰納を完全だと考え、理論が観察された事例すべてに適合するように思われたときに理論が証明されたと考えた。」(Leslie [1870], p.161) そしてこの「検証」の手続きをレズリーは「モンテスキューの方法」であると考え、その方法によって「自然の理論の真理は証明された」と考えたのである。⁽¹⁵⁾ さらにスミスの方法論上の欠点はモンテスキューからもたらされたものであることを次の言葉の中に、示唆することができる。「自然法と歴史的帰納的な方法とのスミスの結びつけがメイン氏の以下の命題に与える一見すると矛盾に見えるものの説明を見出す。その命題とは『モンテスキューの本は、あらゆる欠陥を持った歴史的方法に基づいて展開されており、自然法は歴史的方法以前にはその土台を決して維持しなかったのであった。』」(p.161) つまりスミスが歴史的方法において依拠したモンテスキューも、歴史的方法によって自然法を証明したと、レズリーが示唆していると読むことができる。

したがってレズリーの解釈に従えば、スミス経済学における利己的な動機に導かれた存在の自由な経済活動が社会全体にとって調和的に達成されることが歴史的帰納的に証明されたという論理は間違いだということになる。つまりスミス経済学における歴史的帰納的方法の誤用とレズリーは明確に位置づけることができたはずである。しかしレズリーはスミスをそこまで追い込んではいない。理由は帰納的な分析が演繹的な理論を検証するという目的で行われた作業であったとしても、結果としては多くの歴史的観察対象から豊穡な事実をスミスが見出したからである。スミス思想の中に一方で存在した演繹的な理論(スミス以前からの思想に基づく自然の理論)の後継者の理論において、「摩擦」と

(15) スミスにおけるモンテスキューの歴史的方法の影響はスコットランドの知的伝統において育まれたものであるとレズリーは指摘する。

か「例外」と処理してされてしまう事実が、スミスにおいては例外ではなく、分析上重要なものとして位置づけられた。そしてこのように例外的な事例をも分析対象として重要視する方法はメインの歴史的方法と同一であるとレズリーは主張する。「スミスはそれら（例外）を『削除する』のではまったくないので、それらを分析に向わせるばかりではなく、測定にも向かわせるというメイン卿の考え方を実行する試みの事例を示したのである」（Leslie [1879a], p.386）

そのような事例としてレズリーが指摘するのが『国富論』の第10章「労働と資本のさまざまな用途における賃金と利潤について」である。第8章で労働の賃金について、第9章で利潤について、演繹的な側面からスミスは、自由競争が存在すれば所得は平均化していくはずであると述べておきながら、第10章においては現実における乖離を指摘する。一般的には第10章は政策論との関係において労働と資本の自由な移動が政策によって妨げられてきたことを示し、自然的自由の体系を肯定するための証拠であると位置づけられるのであるが、その格差は政策だけではなく、多様な諸動機（名声・田園の空間的魅力など）に経済主体が促された結果であることを認めるのである。

おわりに

レズリーは、コントの言葉を利用して、以下のように述べる。「未来を予言する前に、我々は過去を予言することを学ばなければならないと。そして付け加えよう。過去を予言する前に、我々の周りの世界で作用している力とそれらとそれらの実際の結果が影響する条件を研究することで、我々は現在を予言することを学ぶべきだと」（Leslue [1879a], p.395）この言葉は現実社会の観察とそこからの帰納した結果によって、既存の理論の検証を第一に行うべきであるという意味を有する。なぜならば「経済世界はかなりの程度まだ分かっていないものであり、それが分かるためには経済学者はそれを、地理学者が自然地理学の世界を探索するのと同じように、探索する必要がある」（Leslie [1879c], p.242）からである。そしてその探索する作業（＝帰納）が忍耐強く行われた上で、始

めて演繹的な分析へと進むことができるのである。(Leslie [1879c] p.241) その認識をレズリーが抱くようになった出発点はメインの歴史的な方法に基づく法学理論の土台への歴史的探求にあったと指摘できるだろう。つまり学究の初期に自らが保有していた自然法的な経済学（神の意思による調和的な世界の把握）に基づいて行った労働運動への提言に対して、自然法の根拠の脆弱性を歴史的に明らかにし、より確実な根拠を歴史的帰納的に模索するメインの分析を学ぶことで、スミス経済学に内在する自然法的な視点とその土台に基づく演繹理論と帰納的な側面とを見出し、スミス経済学の後継者が前者にのみ影響されているという認識を有することになった。そしてスミス経済学の影響を受けた古典派分配論の賃金論において、賃金の格差、それを生み出す経済主体の動機の多様性、そして時代的な可変性を考慮しない賃金基金説は、帰納的に導出された分析とはなっていない代表的な事例として攻撃対象になるのである。しかしそれにとどまらず賃金基金説を批判したロングでさえ、シニア同様ミルの資本の命題を批判する際にミルが意識した現実的な時間と労働者を意識せず、抽象的な視点に基づいている点をレズリーは批判する。またソーントンも賃金決定の歴史的空間的（地域的）な多様性を帰納的に見出さず、賃金決定において労働者と資本家とを対立関係で把握しているという点でレズリーは批判する。

限界生産性に基づく分配論を展開できないジェヴォンズ経済学の背景には当時の労働運動が反映されている。そしてジェヴォンズの賃金論に、帰納的な分析で古典派賃金論を批判するレズリーの分析は大きな影響を与えた。以下の文章にレズリー死亡記事にレズリーのジェヴォンズに与えた具体的影響を見出すことができる。

「彼は、我々の教科書で述べられているような経済学の普通のそして不変の法則と一致しない、事実をよく蓄えられた規則から導き出すことができた。将来の研究はおそらく、この主張された不一致が実際よりも表面的であり、攪乱原因の複雑さのためによるものだということを示すことになるだろう。しかし適切に理解すればこの批判（ジェームズ・ミルとリカードウの経済学体系への）は、

それにもかかわらず有益なものであった。」(Jevons [1882], p.133)⁽¹⁶⁾

帰納的・統計的データと演繹理論との関係についてジェヴォンズは、レズリーとの相違を認識しているが、当時の経済学の流れに対する批判的スタンスは共通していた。そしてレズリーはドイツの歴史帰納的なスタンスに影響を受けたメインから多くを得ていたのである。⁽¹⁷⁾

最後に本稿の問題点を指摘しておかなければならない。1:ジェヴォンズとの関係においてジェヴォンズとレズリーの双方の視点を詳述していない。2:レズリーのイギリス歴史学派との位置づけにおいて、ジョーンズとの関係を明確にしていない。3:2との関係において、メイン以外にレズリーに歴史的機能的方法について影響を与えた他の人物の可能性について吟味していない。他にも数点存在するが、これらの問題については課題としてその後の研究で解明していくことになる。

参考文献

- Black [2002] :Black, R.D.C., The political economy of ThomasnEdward Cliffe Leslie (1826-82) :a re-assessmant, *The European Journal of the History of Economic Thought* 9:1, Routledge, 2002
- Coats [1954] :Coats, A.W., The Historical Reaction in English Political Economy 1870-90, *Economica, New Series Vol.XXI No.81-84*, The London School of Economic and Political Science, 1954
- Foxwell [1888] :Foxwell, H.S., The Economic Movement in England, *The Quarterly Journal of Economics*, Boston, George H.Ellis, 1888. Reprinted by Kraus Reprint Corpotation, 1961

(16) レズリーはジェヴォンズの帰納的な仕事の方法は肯定しているが、太陽黒点説による景気循環論などに対しては「あまりに早急過ぎる」として批判している。つまり方法においてレズリーとジェヴォンズとは相違しておらず、その方法の具体的な詰めにおいて両者には乖離が存在したのである。

(17) コーツはイギリス歴史学派の出現には国内的な歴史的事情が不可欠であるというフォックスウェルとマーシャルの見解を受け入れるが、さらにコーツはメインへの国内的な影響を挙げている。Coats [1954] つまりコーツはメインの歴史的方法をイギリス国内の思想的条件によって確立したと主張していることになる。したがってメインへの大陸からの思想的影響についてコーツは否定していることになる。

- Jevons [1874] :Jevons,W.S.,The progress of mathematical theory of Political Economy. *Transactions of the Manchester Statistical Society, 1874-75*. Reprinted in *Papers and Correspondence of W.S.Jevons VII*, Macmillan, 1981
- [1882] :Jevons, W.S., Obituary, *The Economist*, Feb.4., Vol.XL, Reprinted by NIHON KEIZAI HYORONSHA, 1995
- Koot [1975] :Koot.G.M., T.E.Cliffe Leslie, Irish social reform, and the origins of the English historical school of economics, *Hisotory of Political Economy*, Vol.7, No.3, Duke University Press, 1975
- Leslie [1851] :Leslie, T.E.C., The Self-dependence of the Working Classes under the Law of Competetions, *Transactions of the Dublin Statistical Society*2 (1849-51) : 3-11, in *Irish Political Economy IV*ed. by Tom Boylan and Tadhg Foley, Routledge, 2003
- [1868a] :Leslie, T.E.C., Political Economy and Emigration, *Fraster's Magazine*, May 1868, Reprinted in *Land Systems and Industrial Economy of Ireland, England & Conticental Countries*, London:Longamans, Green &Co., 1870
- [1868b] :Leslie, T.E.C., Political Economy and the Rate of Wages, *Fraster's Magazine*, July 1868, Reprinted in *Land Systems and Industrial Economy of Ireland, England & Conticental Countries*, London:Longamans, Green &Co., 1870
- [1870] :Leslie, T.E.C., The Political Economy of Adam Smith, *Fortnightly Review*, November 1, 1870, in *Essays in Political and Mora Philosophy*, Dublin University Press, 1879
- [1875] :Leslie, T.E.C., The History of German Political Economy, *Fortnightly Review*, 1875, in *Essays in Political Economy* (2ed.), London, 1888. Reprinted by Augustus M.Kelley, 1969
- [1876] :Leslie, T.E.C., On the Philosophical Method of Political Economy, *Hermathena*, iv., 1876, in *Essays in Political and Mora Philosophy*, Dublin University Press,1879
- [1879a] :Leslie, T.E.C., Political Economy and Sociology, *Fortnightly Review*, February 1.1979. in *Essays in Political and Moral Philosophy*, Dublin University Press, 1879
- [1879b] :Leslie, T.E.C., *Essays in Political and Moral Philosophy*, Dublin University Press, 1879
- [1879c] :Leslie, T.E.C., The Known and the Unknown in the Economic World, *Fortnightly Review*, June 1, 1879, in *Essays in Political Economy* (2ed.), London, 1888. Reprinted by Augustus M.Kelley, 1969
- [1883] :Leslie, T.E.C., Political and Economical Heterodoxy: Cliffe Leslie, *Westminster Review*, n.s.64, 1883
- Maine [1861] :Maine, H.S., *Ancient Law*, Henry Holt and Company, New York, 1906
- Mill [1871] :Mill, J.S., *Principles of Political Economy*:with Some of Their Applications

to Social Philosophy in *Corrected Works of John Stuart Mill*, Vols. II-III, University of Toronto Press, 1965 末永茂喜訳『経済学原理』(1), 岩波書店, 1963
Schumpeter [1954] :Schumpeter, J.A., *History of Economic Analysis*, New York Oxford University Press, 1954 東畑精一訳『経済分析の歴史』(全7冊), 岩波書店, 1992

阿部 [1998] :阿部秀二郎「ジェヴォンズの生産理論」『経済学』(第233号) 東北大学経済学会, 1998

阿部 [2005a] :阿部秀二郎「ロッシェアの歴史的方法——サヴィニーの影響——」『経済理論』(第323号) 和歌山大学経済学会, 2005

阿部 [2005b] :阿部秀二郎「イギリス歴史学派の源流——メインへのサヴィニーの影響——」『経済理論』(第327号) 和歌山大学経済学会, 2005

佐々木 [2000] :佐々木憲介「クリフ・レズリーの的方法」『経済学研究』(第50巻 第3号) 北海道大学大学院経済学研究科, 2000

深貝 [1995] :深貝保則「J.S.ミルと賃金基金説」平井俊顕・野口旭編『経済学における正統と異端——クラシックからモダンへ——』昭和堂, 1995

馬渡 [1997] :馬渡尚憲『J.S.ミルの経済学』御茶ノ水書房, 1997